



フィラデルフィア・ファッション：『レディズ・ブック』における良き女性の表象

平芳，裕子

(Citation)

服飾美学, 47:55-72

(Issue Date)

2008-09

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001841>



フィラデルフィア・ファッション

―『レディズ・ブック』における良き女性の表象―

平 芳 裕 子

(一) 前誌としての『レディズ・ブック』

『レディズ・ブック (Lady's Book)』は、一八三〇年にフィラデルフィアでルイス・ゴードイ⁽¹⁾によって出版された女性誌である。同誌は一八三七年、新たな編集者を加えることで誌名を変更し、『ゴードイズ・レディズ・ブック (Godey's Lady's Book)』として知られる雑誌となった⁽²⁾。まさにヴィクトリア朝時代の幕開けとともに誕生し一八九八年まで継続した『ゴードイズ・レディズ・ブック』は、多くの雑誌が短命に終わった当時の出版状況からしても異例の継続期間を誇り、「国民的雑誌 (Book of the Nation)」と称されるにふさわしい発行部数を最盛期には記録した⁽⁴⁾。とりわけその美しく彩色されたファッション・プレートは、一九世紀アメリカの服飾文化を再現する視覚的資料として、服飾史のみならず社会学や教育学、家政学の研究対象として頻繁に参照されてきた⁽⁵⁾。ところがその「前誌」として位置づけられる『レディズ・ブック』は、『ゴードイズ・レディズ・ブック』の「創成期」であり「実験期」と捉えられるがゆえに、これまでその内容が詳細に検討されたことはなかった。その主たる理由には、女性編集者として名声を得ていたセアラ・ヘイル⁽⁷⁾主導のもとに『ゴードイズ・レディズ・ブック』が才能ある作家を開拓し質の高い記事の掲載を目指したのに対し、ゴードイの単独編集による『レディズ・ブック』は当時の慣習に倣い、他誌からの記事の転載・引用を頻繁に行ったため、オリジナリティの欠如した時代の所産と見なされていることもある。しかし『ゴードイズ・レディズ・ブック』の最盛期の人気をもたらし要因がファッション・プレートを始めとするファッ

シヨン関係の記事の充実であることを考慮するならば、それらの記事はヘイルが看板編集者となる以前の『レディズ・ブック』の時代から発展させられたものである。さらには『ゴードイズ・レディズ・ブック』のなかでのちに展開されることになるファッション・プレートをめぐる議論の萌芽は、すでに『レディズ・ブック』のなかにファッションの是非をめぐる問題として立ち表れている。とするならば、『レディズ・ブック』における問題の諸相にこそ、詳細な検討を加えられるべきである。

そこで本論は、一八三〇年から一八三六年までの『レディズ・ブック』に掲載されたファッション・プレートとファッションをとりまく言葉を主たる考察の対象とすることによって、この雑誌がヨーロッパのファッションを受容しながら、なにゆえ「フィラデルフィア・ファッション」というものの確立を目指して言葉を紡ぐこととなったのか、その理由を明らかにするものである。雑誌を通して表象された「ファッション」を分析対象とすること、そしてフィラデルフィア・ファッションをめぐる言説を分析すること、それはいわば良き女性ともいべき女性像をめぐるイデオロギーがどのように形成され、それが女性自身の欲望との軋轢によってどのように変容していくか、そしてその変遷において「ファッション」がどのように表象され、機能してゆくことになるのかを明らかにすることである。このことは単に『ゴードイズ・レディズ・ブック』の前誌としての『レディズ・ブック』のみならず、ヴィクトリア朝時代アメリカの女性像の生成の場面に立ち会うことにはかならない。それではまずファッション・プレートの掲載状況とその特質を検討することによって、ファッション・プレート成立の背景に潜む議論を明らかにしていこう。

(二) 最新流行と「フィラデルフィア・ファッション」

創刊号の冒頭を「イギリスの最新ファッション」と題された記事が飾ったように、ヨーロッパの流行情報は『レディズ・ブック』にとって欠かせぬ話題となった。創刊号では、イヴニング・ドレスやデイナードレスなどを始めとす

る七着のドレスの色や形、素材、装飾の具合などが解説されている。文字情報は『ラ・ベル・アサンブレ』や『レイズ・マガジン（ロンドン刊）』から転載されたものであったが、そのなかでウォーキング・ドレスにはファッション・プレートも掲載された。それが『レイズ・ブック』のオリジナルであることは、「レイズ・ブック第一号」と記されたタイトルに示されている（図1）。一方で、創刊号から数号の間は『ラ・ベル・アサンブレ』から転載されたファッション・プレートが多数を占めたのも事実である（図2）。『イギリス・ファッション』や『フランス・ファッション』と題されたこれらのファッション・プレートは繊細な描写と洗練された色調を誇り、『レイズ・ブック』のオリジナルとの完成度の違いは明らかであった。

創刊から四号を経た一八三〇年十月号では、早くも雑誌の出版地であるフィラデルフィアの装いが掲載されている。パリやロンドンを抑えトップを飾ったこの装いにもファッション・プレートが掲載された（図3）。外出用のドレスをまとった女性の下方に、「フィラデルフィア・ファッション」と小さいながらタイトルが示され、ルイス・ゴードンによって出版されたオリジナルであることが強調されている。以来、「フィラデルフィア・ファッション」は、文字情報としてはパリやロンドンと並び掲載され、ファッション・プレートとしては一年間に四枚ほど掲載されるようになる。のちにはファッション・プレートを制作・掲載するにあたっての話題が巻末の編集後記で取りあげられるようになった。たとえば、『レイズ・ブック』のファッション・プレートは「イギリスの同種の刊行物にも勝るとも劣らぬ」出来映えであり、「（アメリカにおいては）極めて少数の雑誌にしか認めることのできない事実である」と記されている。あるいは「とりわけそのファッション・プレートの美しさで際立つ」と自らを褒め讃え、「フィラデルフィア・ファッションを正しく彩色して再現した初めての刊行物」であるとも宣言されている（三六年三月号一四一頁）。

確かに、創刊当初のファッション・プレートと比べるならば技術的には進歩した。同時代に東部アメリカで出版さ

れた雑誌と比べてみても、質においても量においても、『レディズ・ブック』のファッション・プレートは際立っている。レースの装飾など細部までが緻密に再現されるようになり、物語的な場面設定さえ与えられるようになった。さらに主題を見てみても、たとえば同じくフィラデルフィアで出版された『アトキンソンズ・カスケット』に掲載されたものがもっぱらパリやロンドンの流行情報であったのに対し、『レディズ・ブック』が取りあげたのはフィラデルフィアのファッションである。⁽⁹⁾そして「フィラデルフィア・ファッション」の登場以来、ヨーロッパのファッションは「もの」としての商品情報を太く単純な線描で視覚化しただけのイラストに留まったのに対し、フィラデルフィア・ファッションは以上の特徴を充実させながら定期的に掲載されるようになる。

「フィラデルフィア・ファッション」をヨーロッパのファッション・プレートと比べてみよう。『レディズ・ブック』は、豪華なファッションは下品で愚かしいものであり、「ほどほどの装い (midway between the extremes)」こそが真のエレガンスであると論じた(三四年一月号五九―六〇頁)。確かにレースの装飾は小ぶりで、ドレスの襷も数が少なく、デコルテの開き具合も「控えめ」である。「フィラデルフィア・ファッション」にとって重要であったのは「支配的な流行による色ではなく肌の色に似合う色彩、着ようと思うドレスの他の装飾品と調和する色彩を選ぶこと」であった(三〇年三号一一四頁)。そしてある号の記事ではそれを強調するかのようには、色彩の提案そのものが放棄され、読者自身の想像力にゆだねられた(三五年七月号二頁)。またある号のファッション・プレートには女性に寄り添う子どもの姿が描かれている(図4)。または「ホーム・ドレス」が登場し、赤ん坊に優しくなまなごしを向ける二人の夫人の姿も描かれている(図5)。このように「フィラデルフィア・ファッション」が「慎み深い装い」であること、そして、そのファッション・プレートが社交の場ではなく家庭を舞台としていることは、『レディズ・ブック』における「良き女性」の表象にとって重要な役割を担っている。つまり、「フィラデルフィア・ファッション」とは、『レデ

イズ・ブック』が「ファッション」と「レディ」をどのように捉えていたかを図解する実例なのである。

(三) ヨーロッパ的「レディ」とヨーロッパ的「ファッション」

『レディズ・ブック』とは、その名の示すとおり「レディの書」である。一九世紀前半の英米では「レディ」をタイトルに掲げた雑誌が数多く出版されたが、なかでも『レディズ・ブック』の特徴とはどのようなところにあったのだろうか。『レディズ・ブック』が掲載した物語の一つ、「一八三二年のパリのレディ」(三六年六月号二七八―八一頁)を見てみよう。「何て彼女は美しいんでしょう!彼女のことを全くもって知らなくてはなりません」と始まるこの物語の主人公、アマンダの魅力は「優雅な姿、美しい顔つき、知的なまなざし、服装のセンス」だけではない。

アマンダは刻まれ磨き込まれたダイヤモンドである。彼女のこころは当世のこの上なく優れた教育、洗練された社交界での交際によって作上げられている。彼女の誇りであり勲章でもある当代流行の寄宿学校では、桂樹の冠をすべからく獲得し、全ての榮譽を手にした。立ち居振舞い、音楽、ダンス、詩、話術、言葉だけでなくまなざしと表情で魅惑的に会話する術、彼女はこれらの賞を取り飽きてしまった。というのも、パリの有名なあらゆる寄宿学校で、うら若きレディはドラマチックな技術を教わるのだ。彼女の教養を一言で表現するならば、アマンダは時の驚異である。(三六年六月号二七八頁)

アマンダは「全く完璧な未婚のうら若きレディ」である。そしてこのような物語に描かれた「レディ」のための趣味や教養を掲載した雑誌がほかならぬ『レディズ・ブック』であったのだ。物語や詩だけではなく、歌曲や楽譜、舞踏会やダンス、乗馬、刺繍、身だしなみまで、『レディズ・ブック』はレディであるための必須項目をテーマとして多彩に取りあげた。しかしここで注意しなければならない点は、「レディ」について語った『レディズ・ブック』の読者が必ずしもレディとは限らなかったということだ。それは読者への呼びかけから浮き彫りとなる。

例えば、「レディ」のための晴れ舞台であり出会いの場でもある舞踏会。先の物語のなかで、アマンダの母親は娘のために舞踏会を準備したが、『レディズ・ブック』が掲載したのは「一八世紀における舞踏会——一九世紀における舞踏会」と題された二通の手紙であった（三〇年一号二六頁）。称号のついた数多くの名、フランス語の混じった言葉遣い、幾度も登場する感嘆符から、読者は舞踏会の臨場感を味わうことができたであろう。あるいは舞踏会といえは「ダンス」であるが、「ダンスについての実践的資料 (practical observations on dancing)」と堅苦しいタイトルつけられた記事には、「先生に習いもしないでダンスの知識を得ることはできないように思われます」とある。「けれども、多くの読者は次の資料を注意深く熟読することで、才能を軽んずることなく、ダンスを習っている人々に気づかれることもなく、沢山の利益を引き出すことができるはずです」（三〇年一号二四頁）という。確かに、ドレスの裾をちよつとつまみながらポーズをとる女性の姿から、舞踏会で優雅に踊る貴婦人を想像することは少々困難である（図6）。同じように「上流階級のたしなみである」乗馬について見てみよう。先の物語には、天蓋のないベルリヌでブルーローニユの森へ向かったアマンダの姿が描かれている。馬車を所有するのは上流階級の証であるが、「乗馬」の記事は「教室の厳しいレッスンに耐えられない人々」「最寄りの場所に教室のない人々」「もつと上達したい人々」を対象としているという（三〇年一号三三頁）。また、刺繍の記事では「モスリンのドレス、あるいは部分飾りやケープ、襟、ハンカチなどのための花やその他装飾的デザインを含む白刺繍の刺し方」が取りあげられた（三〇年一号一二頁）。刺繍に適したコットンの種類、掲載された図柄の布地への写し方が説明され、布に転写した花や葉の線模様を一目ずつなぞってゆく刺繍の刺し方がイラストにて図示されている。それだけではない。ギリシア神話に登場する織物の話を端緒として、ヨーロッパの刺繍の種類や歴史までもが紹介されている。

ここで、「レディ」のたしなみについて語った『レディズ・ブック』の記事内容が、舞踏会の開催日時や演劇の上

演日程でなかったことには注目すべきである。⁽¹¹⁾『レディズ・ブック』はあくまで舞踏会や刺繍の歴史を取りあげ、ダンスや乗馬、刺繍の知識と実践方法を記事にした。つまり『レディズ・ブック』は、ヨーロッパの上流階級の趣味や作法を紹介しながら、東部アメリカの「レディ」に憧れる女性たちのための教科書の役割を果たしていたのである。作法とはそれを通して自らを上流階級に位置づけ、下層階級と差別化する手段である。一九世紀前半の東部アメリカで新しい社会を築きつつあったブルジョワジーにとって、作法の習得が彼らの上昇意欲を大いにかき立てるものであったことは間違いない。⁽¹²⁾『レディズ・ブック』は、ヨーロッパにおけるレディを、装いと立ち居振る舞いを見習うべきモデルとして紹介し、ヨーロッパの最新ファッションをファッション・プレートとして喧伝する。しかし同時に、ヨーロッパ的「レディ」とヨーロッパ的「ファッション」は、新興国アメリカの社会に似合った「アメリカ的レディ」へと、「フィラデルフィア・ファッション」の登場とともに書き換えられていくことになる。

(四) 家庭人としてのレディ

『レディズ・ブック』は「レディ」の趣味や作法を教示しながらその一方で、次のように問う。「女性を踊り子に、歌い手に、演奏家に、絵描きに、役者に、彫刻家に、箔職人に、ペンキ職人に、版画家に、刺繍職人にする、それが教育の本当の目的に思えるでしょうか」(三〇年六号三〇九頁)と。「レディ」となるためのあらゆる作法、すなわち「ファッショナブルな妙技 (the fashionable art)」を教示してきたのは他ならぬ『レディズ・ブック』である。それらは「全く賞賛に値する」とさえ述べられている。ところが努力の結果として獲得されたものは「ただ生活を飾る技巧 (the arts) にすぎない」(三〇年六号三〇九頁)という。⁽¹³⁾『レディズ・ブック』にとって、ヨーロッパのレディが体現しているものは社交の場で戯れる虚飾に満ちた女性でしかない。『レディズ・ブック』にとってレディの作法以上に重要であったのは家庭人としての女性の役割であった。

たとえば「妻」(三三年二月号八六頁)と題された記事がある。そこでは、「妻は夫の苦勞を分かち合い、夫の悩みを和らげるのです。というのも、人生には堪え難い困難がつきものではありますが、神聖なるパートナーシップによるお互いの努力と愛情によつてのりこえられるでしょう。」と述べられている。また、「夫の趣味や好みに耳を傾けなければなりません。」(三二年六月号二三六頁) 夫を「励まし、意見を聞きましよう。・・・彼の仕事を支え、彼の心勞を軽くし、彼の悩みを和らげ、彼の喜びを高め、彼の考えを尊重し、彼の子どもを育てるのです。」(三〇年六号三〇九頁)と、夫への接し方に対する具体的なアドバイスも掲載されている。同様に、母としての女性の役割も強調された。「女性は子どもたちの母であるだけでなく、幼いころを全くもって形作ることになるのです。知性の最初の芽生えを見守り、未来の男性の性格を形作るとは女性の特権です。」(三一年七月号二九頁) 女性の「母」としての役割が重視されることとなったのは、とりわけ「男の子」に対する教育を女性が施すからであつた。彼らは共和国の未来を担う存在である。それゆえ、「母」としての作法や会話の技術を有する社会的存在として女性を教育することが、極めて重要な課題と見なされた。さらに、「妻は優しさ以外の武器を使つてはならない。そして家の中のことに専念しなくてはならない」と述べられたように、女性は家事を取り仕切る「女主人」でもなければならなかつた。そこで「レシピ」⁽¹⁴⁾と題された記事では家事の実用的知識が紹介され、家事のルールや使用人の扱い方⁽¹⁵⁾も話題とされた。

このように、『レディズ・ブック』は、「レディ」としての作法を説く傍ら、「家庭人」としての女性の役割を論じた。「妻」として夫を支え、「母」として未来の共和国を支え、「女主人」として家庭を支える女性を論じ、さらにはそのような女性の姿を「妻」(三〇年四号二〇三頁)「結婚」(五号二七四頁)「家」(三一年一月号八頁)「両親」(三〇年三号一二二頁)「愛の家」(三一年二月号二四六頁)「母の愛」(三二年四月号二三九頁)「子ども」(三四年七月号三頁)「妻あるいは家庭の英雄」(三一年二月号三〇五頁)といったタイトルの詩や物語のなかで再現した。「家

がすべて」と唄われたように、家庭の中で幸せを育む女性像があちこちにちりばめられたのである（三〇年三号一五頁）。そしてこの「家庭人」としての女性像は、まさに『レディズ・ブック』の言説によって導かれていた。

『レディズ・ブック』は、レディの「作法」を家庭人の「仕事」として取り込む事によって、まず「作法」と「家事」を結びつけた。たとえば、レディのたしなみとされたダンスは「とても優雅な家庭の朝（very graceful domestic morning）」（三〇年二月号九一頁）に行うものである。ここでは客間を意味するパーラーではなく、domesticという言葉が使用され、社交のダンスが家庭と結びつけられている。また「刺繍」は「楽しい仕事（pleasing occupation）」であり、「優雅な仕事（graceful occupation）」である。しかし仕事といっても決して労働ではなく、「家事の楽しみ（domestic amusement）」（三〇年一月号一二頁）であり、「エレガントで実用的な教養（elegant and useful accomplishment）」（三一年二月号一〇〇頁）でもある。それはレディの単なる手遊びではない。レディの作法は「家事」という口実を見いだすことによってその正当性が認められたのである。それと同じように、「健康」も口実となった。ダンスが「優雅で有益な体操（graceful and beneficial exercise）」（三〇年二月号九一頁）とされたように、乗馬は「健康的で気持ちのよい（health and cheerful）」（三〇年一月号三三頁）行いでもあった。またこの時代の流行となった散歩やガーデニング、入浴も、「レディ」の新しい習慣としてだけでなく、女性の健康を促進するものとして紹介された。¹⁶しかしここでなぜ、健康が作法を語るための口実となりえたのだろうか。それは健康な体に宿る豊かな心こそが、愛情生活を育むことができる¹⁶とみなされたからである。お茶の習慣さえも「家庭的な愛情を育成する（cultivating domestic affection）」（三四年二月号八八頁）と見なされる。レディの作法は「家事」や「健康」といった言説と結びつけられることによって、まさに調和ある女性像を導きだしていたのである。

(四)「優雅な女性」の装いとしてのフィラデルフィア・ファッション

これまでわれわれは、「レディの教科書」として東部アメリカの女性たちに「レディ」の作法を教示する一方、「家庭人」として女性が果たすべき責務についても論じる『レディズ・ブック』の二つの側面を明らかにしてきた。ここでファッション・プレートを中心に展開した「ファッション」の問題に立ち返ってみよう。なぜならば、「ファッション」は「装い」としてレディの重要な作法の一つであったし、その「レディ」の在り方において、「フィラデルフィア・ファッション」誕生の問題と密接に関係しているからである。

すでに述べたように『レディズ・ブック』にとって、パリやロンドンの最新流行は欠かせないテーマであった。それはヨーロッパを遠くはなれた新しい社会を生きた女性たちにとって見習うべきモデルである。そして着飾ることの自由が獲得された近代の市民社会において、ファッションへの欲望を妨げる法令はもはや存在しない。「ファッション」とはまさに外見そのものの作法であることによって、自らを表すことも可能であれば、他者を欺くことも容易である。それゆえファッションは、商業経済の発展とともに財力も社会的地位も得ようとするブルジョワジーの欲望を満たす手段となった。ところがファッション・プレートの発展とは裏腹に、『レディズ・ブック』が取りあげた話題は常にファッションを謳歌するものばかりではなかった。たとえばある記事ではファッションの移ろいやすさと非合理性が批判されている。ファッションは気まぐれで専制的であり、着心地や便利さ、常識などといったものは気にとめない。女性たちは極寒のなかを透けるようなドレスを着て、そうかと思えば体を閉じ込めるような服が流行するという(三四年五月号二五三頁)。とりわけ糾弾されたのは、当時の流行のスタイルを作り出すための必需品「コルセット」である。『レディズ・ブック』が掲載したのは、当時出版された解剖学の書物を典拠として、コルセットが女性の体に与える弊害について論じた文章であった。イラストには健康的な女性の骨格と、コルセットの使用によ

って変形した骨格とが併置され、コルセットが女性の体や出産に与える影響について論じながら「コルセットをやめるか、つけるのならば柔らかい素材のもの」に変えることを進言している（三四年六月号三〇六―七頁）（図7）。『レディズ・ブック』は「ドレスの美の極致」（三〇年第一号四六頁）について論じるものではないと釈明し、「装い（dress）」や「身だしなみ（toilet）」という言葉を用いることで、「ファッション」という言葉を避けさえる。一方ではファッション・プレートの技術的・芸術的發展を強力に推進しながら、一方ではヨーロッパから輸入されてきたファッション自体を否定する。一見矛盾するような言説を紡ぎながらも『レディズ・ブック』は、最新流行のファッションとは別の規範に基づく装いを生み出すことによって、着飾ることへの飽くなき欲望を抑制しようとする。それはファッションを通して女性の振舞いを教化することでもあったのだ。それでは『レディズ・ブック』の論じるファッションとはいかなるものであったのか。

『レディズ・ブック』にとってファッションは、ただ目を楽しませるだけのものであつてはならない。しかし一方で「肌が綺麗ただけではなく、美しく見えないといけない」（三〇年三号一一四頁）と言われたように、他人の目から見て「美しい」と見なされなければ、どんなに綺麗な肌であつても意味をなさない。女性のこころの「明るさ」や「楽しさ」を表すかぎりにおいて、ファッションはきわめて有用なものであるが、女性の健康を害する「ただの飾り」であれば、それらはたちまち非難されるべき対象へと変化する。ファッションとは、それをまとう人の純然たる内面の表現となりうるときはじめて、「こころの飾り」（三〇年一号四六頁）として認められる。『レディズ・ブック』は、「レディ」としての作法と「家庭人」としての良き行いに結びつけたが、それは女性の内面と外見を結びつけ、「良き女性」の姿を「レディ」の作法を通して表現するべく説くことでもあったのだ。外見の慎み深さが内面の表現である限り、ファッションは好ましい「作法」⁽¹⁷⁾となるのである。そして『レディズ・ブック』は、そのような装いを最新流行に代表

されるヨーロッパのファッションから差別化するために新たな名を必要とする。それこそが先に述べた「フィラデルフィア・ファッション」なのである。慎み深く、控えめで家庭での役割をこなしながら優雅に振る舞うための装い、フィラデルフィア・ファッションとは、アメリカのレディが身に纏うファッションが視覚化されたものに他ならない。「家庭人」としての仕事の重要性を論じた『レディズ・ブック』にふさわしく、そこにはただファッションに興じる淑女ではなく「母」として振舞う女性の姿が描かれている。先には子どもとともにある母としての女性がプレートに描かれている例を紹介したが、別の例として刺繍の施された手袋をつけた夫人の姿を見てみよう(図3)。「刺繍」は『レディズ・ブック』が好んで取りあげたテーマであるが、それらの記事ではギリシア神話の登場人物であるペネロペの名が引用されていた。ペネロペとは、帰らぬ夫を待ちながら、次々やってくる求婚者を、織物が未完成であることを理由にことわり続ける妻の名である。織物を織つては、それが完成してしまわないように夜中にそれをほどこき続けるペネロペ⁽¹⁸⁾。その名が読者に喚起する女性像は、手遊びに興じる夫人ではなく、あくまで貞淑な妻の姿である⁽²⁰⁾。そして女性たちは、そのような妻の良き行いを外見を通じて表現することさえ求められた。とりわけ刺繍は「すばらしく純真な楽しみ」であり「上品な仕事」であるだけでなく、女性たちの「趣味と才能を誇示する機会」をもたらすものでもあった(三一年九月号一八八頁)。ドレスにつけられた優雅な手作り装飾品は、まさに良き妻の良き行いを他者に対して視覚化するためのものでもあったのだ。ここで『レディズ・ブック』のファッション・プレートは、ただ装いの指針であるだけでなく、あるべき女性の姿を映し出す鏡として機能していたのである。

(五) 結びにかえて

『レディズ・ブック』のファッション・プレートに描かれたのは「立派なレディ (fine lady)」に代えた「優雅な女性 (elegant women)」の姿であった(三一年十月号一九四頁)。そして『レディズ・ブック』はそのような装いに

「フィラデルフィア・ファッション」の名を与えた。それにしてもなぜ、「フィラデルフィア」でなければならなかったのだろうか。フィラデルフィアは、独立宣言の起草の行われた都市であり、一八世紀においては東部アメリカを代表する都市であった。『レディズ・ブック』の編集後記で露にされたヨーロッパの雑誌に対する対抗意識、そして東部アメリカの雑誌における優越の主張を見るかぎり、『レディズ・ブック』はフィラデルフィアをパリやロンドンに継ぐ一つの流行文化圏を形成する都市と見なし、「フィラデルフィア・ファッション」の確立とその再現に尽力していたように思われる。それでは「フィラデルフィア・ファッション」とは、アメリカ的なものの独自性や創造性の確立のために標榜された名であったのだろうか。ところがその名は、雑誌が『レディズ・ブック』から『ゴードイズ・レディズ・ブック』へとタイトルを変更されると語られなくなってしまう。ファッション・プレートはますますの発展を見るにもかかわらず、その装いはもはや「フィラデルフィア・ファッション」とは呼ばれなくなってしまうのだ。ならば『レディズ・ブック』が作法の紹介に際してことさらヨーロッパを参照したのはなぜなのだろうか。

その理由の一つには、大西洋を遠く隔てた大陸の歴史にアメリカの過去を見いだす試みが挙げられよう。一八世紀以前、いやギリシャ・ローマにまで遡る歴史は他者の知識ではなく、かつてアメリカという（入植者たちにとって）歴史をもたない土地に移り住んだ移民祖先の故郷に関する知識であり、移民子孫の起源としてのヨーロッパを想像的に取り込む効果を持っていたと考えられる。しかし「作法」がこれだけ重視されたことの背景には、作法の習得がただ体面の保持に繋がるだけではなく、ブルジョワジーの自己研鑽の精神にも、プロテスタントの自己統御の精神にも通じる点があったことが指摘できるだろう。教室に通い人から教えを乞うのではなく、『レディズ・ブック』を通して自ら学ぶ女性たちを、『レディズ・ブック』は“self-taught artist”と呼んだ（三〇年四号一九〇頁）。たとえば最初は「素人（amateur）」であったとしても、女性たちは努力を重ねることで技術（the arts）を身につけ、「アー

テイスト (artist)」とすらなれる。この言葉に、われわれは近代的な「芸術家」像を見てはならない。『レディズ・ブック』は、さかんに装飾品のイラストや刺繍のパターン図を掲載したが、図柄そのものを考えだしたり、掲載したパターンから複雑な模様を展開したりすることを奨励していたわけではない。ただ「パターンはファンシーショップで購入することができますが、絵心のある女性ならば自分でデザインしてしまうでしょう。」(三一年二月号一〇九頁)と述べられているだけだ。読者がいかに「独創的な」図柄の刺繍を作り出すかはそこでは問題となっておらず、パターン通りに再現することが求められている。つまり重要なのは独創性の発現ではなく、模倣のプロセスそのものであった。手本に忠実に従うことによってこそ、女性たちは作法の「名人 (artist)」となりうる。そして「フィラデルフィア・ファッション」という愛国的な標語のもとに言説化されたのは、まさにそのような女性の良き作法であり良き表現であったのだ。

(神戸大学)

〔付記〕 本稿は科学研究費補助金平成十九年度若手研究 (B) 「『ゴードイズ・レディズ・ブック』における良き女性とファッションの表象」の研究成果の一部として公表するものである。

〔注〕

- (1) 一九世紀アメリカの出版者であるルイス・ゴードイ (Godey, Louis Antoine, 1804-1878) の仕事には、*Lady's Musical Library* (1842), *The Young People's Book or Magazine of Useful or Entertaining Knowledge* (1841) が挙げられる。
- (2) 一八三七年以降、雑誌名の変更が度々行われた。正式名称は *Godey's Lady's Book and Ladies American Magazine* (1840-1843), *Godey's Magazine and Ladies Book* (1844-1848), *Godey's lady's Book* (1848-1854), *Godey's Lady's Book and Magazine* (1855-1883), *Godey's Lady's Book* (1883-1892), *Godey's Magazine* (1892-1898) である。
- (3) Bertha Monica Stearns, "Early Philadelphia Magazine for Ladies," *The Pennsylvania Magazine of History and*

Biography, 1940, October, p.479.

- (4) 南北戦争前の一八六〇年までには十五万部を誇る雑誌へと成長した。発行部数の変遷については以下を参照。Frank Luther Mott, *A History of American Magazine 1741-1850*, Cambridge: Harvard University Press, p.581.

- (5) 例えは以下を参照。Nancy Lee, *Godey's Lady's Book and its relationship to adult education: a historical analysis*, The University of Oklahoma, 1985. Gail Caskey Winkler, *Influence of Godey's "Lady's Book" on the American woman and her home: Contribution to a national culture (1830-1877)*, The University of Wisconsin, 1988. Mary Jane Lewis, *Godey's Lady's Book: Contributions to the promotion and development of the American fashion magazine in nineteenth century America*. New York University, 1996.

- (6) Caroline John Gansey, "Ladies' Magazines to 1850. The Beginnings of an Industry," *Bulletin of the New York Public Library*, 1954, p.75.

- (7) 現代では「メリーさんの羊」の作詞家として知られるセアラ・ヘイルは『レディズ・ブック』に携わる以前、ボストンで『レディズ・マガジン』を発行していた。一九世紀半ばの感傷小説の再評価とともに、作家であり女性編集者としてのヘイル像が再評価されるようになった。詳しくは Patricia Ann Okker, *Feminizing the voice of literary authority: Sarah J. Hale's editorship of the 'Ladies' Magazine' and 'Godey's Lady's Book'*, University of Illinois at Urbana-Champaign, 1990. パトリシア・オッカー、『女性編集者の時代』鈴木淑美訳、青土社、二〇〇三年を参照。

- (8) イギリスのヴィクトリア女王の在位期間中（一八三七年～一九〇一年）の支配的文化を意味する「ヴィクトリアニズム」の呼称は、アメリカの同時代の文化を指し示す言葉としても使用されている。Daniel Walker Howeはアメリカのヴィクトリアニズムをイギリス文化の単なる派生ではないと指摘する。アメリカのヴィクトリアニズムは、「イギリス系アメリカ人、プロテスタント、中流階級」の人々の支配的文化であることを超えて、さまざまな民族、階級が混在するアメリカにおいて一つの文化的モデルを形成した。詳しくは Daniel Walker Howe, "American Victorianism as a Culture," *American Quarterly*, 1975, December (Vol.27, No.5), pp. 507-532. pp.507-532.

- (9) 『アトキンソンズ・カスケット』は「最新ファッション」というタイトルでパリやロンドンの流行を再現したファッション
フィラデルフィア・ファッション

ヨン・プレートに掲載した。同誌は後年、パリの服飾店のファッション・プレートによる宣伝広告を掲載している。

- (10) 例えばロンドンの *The Lady's monthly Museum* (1798-1832)、東部アメリカの *Lady's Portfolio* (1820-21) や *Lady's Miscellany* (1825-26) 等、多数の雑誌が存在した。東部アメリカについては前掲Garnseyの論文末のリストに詳しい。

- (11) 例えばロンドンの『レディズ・マガジン』や『ラ・ベル・アサンブレ』にも舞踏会や演劇、演奏会などに関する記事が取りあげられたが、記事には催しの開催日時と場所、演目などを記した極めて実情的な情報として掲載されていた。

- (12) 生活の中で作法を体得する上流階級とは異なり、ブルジョワジーは作法を学ぶ手段をもたない。『レディズ・ブック』は、当時出版された数多くの作法書と同じように、東部アメリカの社会的要請に応えたといえる。同時代の作法書については次の論文に詳しい。Jane E. Rose, "Conduct Books for Women, 1830-60. A Rationale for Women's Conduct and Domestic Role in America," in *Nineteenth-Century Women Learn to Write*, The University Press of Virginia, 1995, pp. 37-58.

- (13) しかしここで「レディ」の作法は全否定されているわけではなかった。「自己顕示 (exhibition) は、簡単には捨てられない習慣となっています。その欲求は、ある程度満たされるべきです」と一定の留保をされつつも、「こんな習慣が続くべきであるとは、不思議に思えないでしょうか」と問いかけられる (三五年一月号二三頁)。ここからは「レディ」の習慣を容認しつつも、作法を披露する「レディ」を批判せざるをえない微妙な立場が伺える。

- (14) レシピではさまざまな家事の方法が解説された。例えばウールの洗濯方法 (三二年一月号二一六頁)、羽毛などの染色方法 (三一年四月号二二四頁)、保存食品 (三一年三月号一六八頁) や香水の作り方 (三一年五月号二八〇頁) がある。

- (15) フィラデルフィアの三万世帯のうち二万世帯に使用人がいたとされている (一八三五年六月号)。主人の使用人に対する不満はエッセイや「使用人の術策」 (三三年二月号一一三頁) と題された読み物などから伺い知ることができる。

- (16) 入浴は身体に害悪をもたらすものとして長く忌避されてきた習慣であったが、イギリスで入浴が奨励され始めたこと、また古代ローマの入浴の習慣を紹介しながら、『レディズ・ブック』はぬるま湯で体を洗うことを推奨した。とりわけ皮膚をこすることが清潔を保つと同時に軽い運動にもなると論じた (三一年一月号三五〇頁、三五年一月号二三九頁)。

- (17) 上流階級の豪華な服飾とは、近代以前の階級社会においてはそれを纏う人の存在そのものと結びつき、社会的地位の指標としての役割を担っていた。ファッションやモードという言葉が「作法」や「習慣」を広く意味していたように、ファ

ツシヨンとは身体とその振舞いを通して他者に視覚化される「作法」であつたのだ。詳しくは拙論「ファッション—まなざしの装置」『服飾美学』第三九号、二〇〇四年、三七〜五四頁を参照。

(18) ホメロス『オデュッセイア(上)』呉茂一訳、岩波書店、一九七二、四四―四五頁。

(19) ペネロペと同様、アラクネもギリシア神話からしばしば引用される。女神アテナに織物競争を挑み、その技術を過信するあまり罰として蜘蛛に変えられてしまうアラクネは、『レディズ・ブック』において室内や身の回りを整理整頓しない女性に喩えられ、悪徳の象徴と見なされている。しかし「紡ぐ女性」や「織る女性」が美徳の象徴的な図像であつたことは『象徴としての女性像』(筑摩書房、二〇〇〇年)において若桑みどりが指摘するとおりである。

(20) まさしく「女性の良き作法について」と題されたルネサンスの女性論と比較するならば、『レディズ・ブック』に表象された「家庭人」としての女性の良き作法のストイックでプラトニックな側面が一層際立つであろう。熟女が新妻に愛(アモル)の手ほどきをする同書の対話のなかでも、「若き淑女の心得」として「一日中召使いに何をすべきか指示すること」や「夫が帰ってきたら、彼を出迎え、彼の帰宅がうれしいことを表現しなさい」といった勧めがある。しかしそれらは「家庭人」としての女性の振舞いを教育するためではなく、夫以外の男性とのアモル(浮気)を享受するために身につけておくべき「良き作法」として提示されているのである。アレックスサンドロ・ピッコロミーニ『女性の良き作法について』岡田温司・石田美紀訳、ありな書房、二〇〇〇年。



図1 「ウォーキング・ドレス」
1830年第一号



図2 「イヴニング・ドレス」
『ラ・ベル・アサンブレ』より転載



図5 「ホーム・ドレス」
1832年7月号



图6 1830年第一号

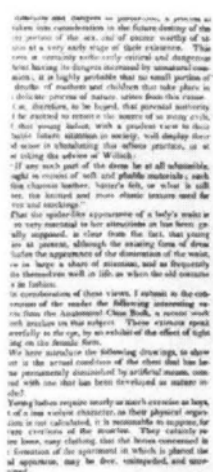


图7 1834年6月号



図3 「フィラデルフィア・ファクション」1830年10月号



図4 1832年10月号